MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリ読書案内

２０２３．４．３０　発行元
第 472 号　伊藤　剛
https://mystery-dokuan.com

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

連城三紀彦の代表作

探偵小説専門誌『幻影城』新人賞の出身で、私にはなじみ深い連城三紀彦の代表作を取り上げる。独特の文章と世界観で注目をあびた作家も、今では少し影が薄くなりつつある。忘れないでほしい作家なのに…。

『幻影城』が出発点

市内の図書館の開架書棚から連城三紀彦の本はどんどん消えていく。もうほとんど置いていないところもある。多くの人の目に触れるところからなくなってしまうのは寂しいことだ。一部の興味を持った人しか閉架の本を手にしない。それが現実なのだけれども…。

連城三紀彦は『幻影城』新人賞がスタート。『変調二人羽織』が受賞作。雑誌『幻影城』は廃刊してしまったけれども、活躍の場所を移して傑作を生み出し続けた。

彼の代表作。『黄昏のベルリン』は抜きん出て評価が高かった。短編に切れ味の鋭い作品が多かったのも連城三紀彦の特徴で、講談社のシリーズで言うと『変調二人羽織』にしようか『戻り川心中』とどちらにしようかと迷った。吉川英治文学新人賞になった『宵待草夜情』という選択肢もあるかもしれない。

長編で言うと今回取りあげなかったが、『私という名の変奏曲』は『黄昏のベルリン』と同等の出来。『敗北の凱旋』も面白かった。後期になるとミステリの枠から外れた作品が多くなった。でも『人間動物園』や『小さな異邦人』なども印象に残る作品だった。

NO.3 『暗色コメディ』

１９７９年幻影城ノベルス。私の手元に初版がある。長編第一作に当たる。その後双葉文庫版と文春文庫版も出ている。

序章で四人の男女が登場する。夫に自分と同じ名前の愛人がいると思い込んでいる古屋羊子。画家なのだが自分の実力のなさに何度も自殺を試みようとする碧川宏。妻にあなたはもう死んでいるのだと言われている葬儀店店主の鞍田惣吉。自分の妻がある時別人と入れ替わったと思い込んでいる外科医の高橋充弘。こういう「もやもやっとした設定」で読者の戸惑いを導き出すのが作者の得意技。この四人にどんな関係があるのか…、これが大きな謎として提示されている。それはやがてある精神病院に結び付いていく事になるのだ。

NO.1『黄昏のベルリン』

１９８８年講談社。『講談社推理特別書下ろし』シリーズの中の一刊として書かれたもの。『このミステリーがすごい！』年間ランキングでは第三位に、週刊文春ミステリーベスト 10 では第一位になった。その後文庫になっているが、現在の古書市場で私の手元にある単行本初版には６０００円以上の値がついているようである。シリーズで集めている人がいるのかもしれない。

これまでの連城作品から考えると少し異色の作品に見える国際謀略・スパイ小説系統に属する作品。当時はまだ大戦後の東西対立が続いていた時代で、ベルリンには東西を分ける「壁」が大きく立ちはだかったいたのだ。冒頭にでてくるのは、リオデジャネイロでの出来事。「ハンス」と呼ばれること嫌がった男が…。何やら過去を背負った人物が関わってくることが示される。続いてニューヨーク。空港で出発していこうとするマイクを見送るエディという二人組。そして同時刻の東京の場面が書かれる。物語の中心になる画家の青木優二が登場。大学の講師もしているのだが、教え子の野川桂子と会うはずだったのに別の女性・エルザと出会う形になる。そして、ベルリン、パリと世界各地の出来事が収束していく形になっていくのである。

No.2『「戻り川心中』

１９８０年講談社。雑誌『幻影城』と『小説現代』に連載した作品を集めた短編集。講談社のこのシリーズでは、連城の最初の作品『変調二人羽織』は第二集の方に収められている。『戻り川心中』はその後の作品になるのだが、こちらの方が第一集になっている。日本推理作家協会賞短編部門受賞作品。古書市場ではこの単行本３０００円～１００００円くらいの値段がついている。村上芳正の表紙絵が印象深い。帯には「新探偵小説・花葬連作集」とある。このシリーズ名は定着しなかったようだ。巻頭の『藤の香』の出だし「色街には、通夜の燈がございます。」で見てもわかるように「ございます」という語り口調の独特の文になっている。大正、昭和初期の雰囲気によくマッチしている。

表題作の『戻り川心中』は、大正末期の天才歌人・苑田岳葉の心中事件に纏わる話として書かれている。小説家らしき「私」が三十年前の岳葉の最後を振り返って、世間には隠された事の真相を深めていく内容。途中まで書きかけて中断した『残燈』という小説の後半部分の形。男女の思いの秘められた部分。世間的に噂される表面上の出来事の裏には他人が踏み入れることのできない複雑な考えが存在していることを示す。